

論文

## 台湾の媽祖信仰についての一考察

—その意味象徴の変遷をめぐって—

陳 佳秀<sup>1</sup>

### A Study of the Transformation of Meaning and Symbols Associated with the Taiwanese Marine Goddess Maso

Chia-hsiu CHEN<sup>1</sup>

#### ABSTRACT

Taiwan is an immigrant society and most of its cultural customs, religious practices, and beliefs came from China during the seventeenth and eighteenth centuries. Belief in the marine goddess Maso, now deeply rooted in Taiwan, also came from China. The beliefs and practices that originated in China have evolved in the Taiwanese context as society in Taiwan continued to change over time. This paper examines certain changing features of Maso belief in Taiwan and highlights the semantic symbolism of this belief for the immigrant society of Taiwan.

キーワード 航海守護神, 王船信仰, 華人移民圏, 民俗の変遷, 民族のアイデンティティ

*Keywords:* marine deity, Wan-Yah belief, Chinese immigrants, changing of folk customs, ethnic identity

#### 1. はじめに

中国, 朝鮮半島, 日本, 琉球列島および台湾群島にまたがる東シナ海域は, 一つの海洋を囲む諸国, 諸民族の関係がとり結ばれた海域である。その東シナ海域における航海守護神として, 媽祖<sup>1)</sup>という共通の文化要素が存在したことが明らかにされている<sup>2)</sup>。その背景には, 12世紀以降, 中国人の海商が海上交易を展開し, その刺激をうけて, 東シナ沿岸の各諸国, 各民族との交易活動が盛んに行われ, 東シナ海域の各民族の間に緊密な通交圏が形成されてきたという歴史がある。

台湾における漢人の歴史的, 社会的構造を見れば, その移民者の出身地は, ほとんどが中国の福建省からである。明末清初期に, 中国南部の福建地方の漁民や海商の海外進出, 移動によって, 台湾の移民圏が形成されると同時に, 双方の交易により交易圏も形成された。この時期に中国南部の文化や信仰・宗教なども, 福建地方の海外貿易者たちによって, 周縁地の日本, 琉球列島, 台湾, 東南アジアにまで伝播され, 広がっていった。その中で,

中国南部沿岸の代表的航海安全の守護神である媽祖も台湾へ伝播してきた。

しかし, 外来の文化や宗教信仰などには, 伝播過程における地域的独自性が存在しており, 外来文化と在来文化との多様な文化を交えながら, それらの変容や融合した現象が伴っていたとみられる。その結果, 異国への伝播土着化の過程において, 信仰や祭祀などに大きな変化があったと考えられる。筆者はこれまで西南日本の媽祖信仰について研究してきた<sup>3)</sup>。

本稿では, 現在もっとも媽祖が信仰されている地域である台湾を取り上げ, その地域的・社会的文脈を通して媽祖の神格を分析し, どのような神格的機能に分化したのかを, 地域性の背景から分析し, その象徴的意味の変容について考察する。

#### 2. 台湾への入植移民

##### 2.1. 移民者の地域性

本稿で取扱う対象としての「台湾人」は, 鄭成功時代

<sup>1</sup> 891-0197 鹿児島市坂之上8-34-1 鹿児島国際大学大学院国際文化研究科

Graduate School of Intercultural Studies, The International University of Kagoshima, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0197, Japan  
2012年5月26日受付, 2012年8月23日採録

から戦前までに移住した福建、広東系の人々を指す。すなわち、第二次大戦後中国本土から撤退してきた人々、官吏、軍人およびその家族とか、台湾の原住民である高山族などは除く。台湾における文化の根底には、中国大陸文化の一部である福建、広東などの特殊な地域的環境と歴史的背景があるが、その文化現象や、伝統慣習、民間信仰などは時代の流れと共に変容しつつあると考えられる。

その歴史を振り返ってみると、明末清初に政治的、経済的原因で台湾へ移住した人々がいかに中国の宗教や民間信仰を台湾にもたらし、そしてどのように営んだのか明らかではない。少なくとも、小規模な寺廟以外には知られていない。そして、外来の宗教では、鄭成功がオランダ人を排除するまでに、スペイン人がすでにカトリックを布教し、オランダ人によってキリスト教が伝えられてきた。その後、鄭成功の入台湾以後、大陸からの移民が多くなり、民間信仰なども次第に台湾で広がっていくことになった。

台湾における民間信仰の特徴としては、移民者の出身地と深く関わっていることが指摘される。当時、開拓の初期において、文化や信仰・宗教などはほとんど移民者の出身地からもたらされたものである。例えば、民間信仰の対象として、漳州人は開漳聖王を奉じ、泉州人は廣澤尊王を奉じ、廣東人は三山国王を奉じるなど、台湾への移民者たちが中国の各地からもたらした神仏は、郷土的守護神の性格が強いと考えられる。また、その移民者の出身地の影響が台湾のそれぞれの地区の民俗に色濃く反映している。こうした移住者の集団には、郷土神の違いによる地域的信仰が見られた。例えば、福建の泉州人は、康熙、雍正の期間には、北部の淡水河邊一帯で開墾に入植し、乾隆初期の水仙宮をはじめ、晋江安海幫に龍山寺、安溪幫に清水祖師の廟、同安幫に大道公の廟が相継いで建立された。それらの寺廟にはそれぞれの移住者の地域的信仰が示されている。しかし、その中でも、媽祖は既に地域差を越えて信仰されていることが大きな特徴である。

他方、当時中国からの移住者たちは、異集団、異出身地ごとに各自の集落を形成し、集落の団結力は非常に強かった。従って、農地開拓や生活習慣の相違から、しばしばトラブルや反乱が起こった。例えば、現在台湾で最も規模が大きく歴史のある「基隆中元節」という祭祀がある。この祭祀の起源として次のように伝えられている。

清朝の時代に中国大陸からの大勢の移民者たちが台湾

に住み着き、水利開発や開拓のため、水や土地の争奪が起こったり、出身地が異なる人々の間で喧嘩などの争いが起こったりした。このような紛争はエスカレートして、ついに清朝の咸豊元年(1851)には、北部の基隆に大騒動(「漳泉機門事件」)が勃発した。この事件で大勢の人々が亡くなったが、それ以降「基隆中元節」では、その事件で亡くなった先祖の移民たちを供養するようになった。このように、初期開拓民が出身地の相違により、農事をめぐって武力を背景とする争乱をしばしば起こしたという事実がある。台湾の民間信仰を考察する場合、当時のこうした社会的状況を見のがしてはならない。

## 2.2. 華人移民圏の形成

### 2.2.1. 主要な海外への移動時期

中国人における移民の歴史は、次のような三つの時期に分けることができる。この三つの時期の移民は、それぞれ移民先と性格が異なっている。

第一期：7-8世紀の澎湖諸島および台湾への移民

第二期：15世紀の鄭和の遠征による東南アジアへの移民と、それ以降17世紀中葉の明清交替期頃までの台湾への移民

第三期：18世紀末以降の移民の公認による労働力移民

第一期を歴史的に遡ると、隋煬帝時代(7世紀)に台湾へ人を派遣したり、台湾へ来島したりしたことがあった。その後、唐の時代から宋の時代に至る600年間、大陸の沿海の人々、特に福建の泉州、漳州一帯の人々は、戦乱から逃れるため澎湖島や台湾へ次々と渡って開拓を始め、特に12世紀初頭の北宋末期や南宋初期は、澎湖諸島に向けた移民が増大した時期である。

台湾で最初に中国の版図に入ったのは澎湖諸島である。元代(1335年)に、澎湖島に「巡檢司」が正式に置かれ、澎湖島と台湾に住む人々を管理するようになった。そして明代に入ると、台湾海峡を倭寇が荒らし回ったため、その攻撃を防ぐために、澎湖の軍事的重要度は高まったが、台湾本島では無視され続けた。従って、オランダが澎湖を占領した時(1624年)も、明朝は澎湖から必死でオランダを追い出したが、台湾はオランダに占領されたままであった。このように、明代以前の台湾は、中国大陸にとって興味の対象外であった。

第二期は、15世紀に鄭和が南洋遠征した前後の時期から17世紀中葉の明清交替期の頃までである。鄭和による7回の南洋遠征により、中国の朝貢貿易も増大し、その朝貢貿易と表裏一体となって、ジャンク貿易の全盛期が現出した。これによって移民も増加し、入植地はマレー

半島、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、スールー群島、フィリピン諸島に拡大した。

そして、16、17世紀の明末清初の中国では経済的高揚期に当たり、対外関係において朝貢関係というゆるやかな統治関係を維持し、その内部では朝貢貿易と呼ばれる貿易関係が形づくられていた。朝貢とは、アジア域内のとりわけ東アジアの貿易網を形づくる前提となったものであり、民間交易の拡大を促すとともに、アジア域内交易の主要なルートを形づかった。朝貢貿易に伴う民間交易も次第に増加した。シャム（タイ）、マラッカ、ベトナム、ジャワ、フィリピン、日本、朝鮮その他の各地は、中国（華南、華北、東北）とつなぐ朝貢貿易網を利用して地域間の沿岸貿易（ジャンク貿易）を結合させ、それと表裏一体をなして中国南部からの移民の拡大が進行した。

以上のように、明の朝貢貿易で作りあげた交易圏がどのように東シナ海域に影響を与えたかという点、まず、朝貢貿易によって、南部の福建や広東における対外関係の拡大の基礎が築かれた。また、その流通ネットワーク貿易が、各地に定住する中国商人によって準備され、中国人のジャンクによって形成された。また、これに伴う貿易の拡大、とりわけ中国への米穀の輸入は、華南経済にとって不可欠であった。華南における米作の好不調と輸入量の大小とは、完全な補完関係をなしていた。例えば、海南島や広西沿岸の人たちはインドシナ半島へ米作のために出稼ぎをしていた。このように、中国商人がつくる華南と東南アジアとの間の流通ネットワークは、朝貢貿易と重なり合い、両者の関係を相互に強化することとなった。

そして第二期における海外移住の潮流は台湾列島にも波及した。特に、17世紀中葉、明末清初期の戦乱時期をピークとして、台湾で発展した福建系の華僑移民者があげられる。この時期に、後期倭寇の活動を加えて、環シナ海域の交易や交流が最も進展した。

第三期は、18世紀末以降の西欧勢力による本格的植民地開発に伴って、「華工」と呼ばれる大量の無資本労働者が海外に移動した時期である。

以上の三つの時期が、中国人が海外に移民した主な時期に当たる。本稿では、上記の華人移民期の第二期に、東アジア沿岸地域にどのような影響があったかについて、次節で考察する。

## 2.2.2. 台湾への入植移民

上記の海外移住を生みだした主要な原因は、中国における慢性的な人口過剰である。特に、南部沿岸地域の福

建、浙江、広東などの地域である。福建省の地形は山に囲まれ、平野が狭く、水田耕作面積が限られ、耕地が不足する地域である。このような状況で、明朝の中期までにすでに人口が飽和状態になっていた。そして、この人口増加問題はすでに宋代からあり、その結果として、海外移住が発生したのである。また、明朝の海禁政策にもかかわらず、その地域の人々は南洋方面や台湾に進出していくことを促された。例えば、台湾南西沿岸近海のボラなどの豊富な漁業資源を当てに、多数の漁民が漁をするために出航し、台湾沿岸に寄港したり、食料や薪を補給したりして、交易をおこなった<sup>9)</sup>。

一方、大陸側においては、砂糖や米の生産が不足していたが、台湾の米や砂糖などが福建省に供給されていたという。このような背景の下で、ヒトやモノなどの移動が東アジア海域圏の交易ネットワークを刺激し、交易と移民を拡大させたと考えられる。

他方、1567年の明朝による海禁緩和によって、中国人の東南アジア渡航が許可されたが、中国人の日本渡航は依然禁止されていたため、私貿易港の拠点を台湾やフィリピンに移し、私貿易が行われていた。これらの私貿易の拠点であるマカオ、台湾、フィリピンなどは、中国人、日本人、ポルトガル人、スペイン人による略奪の対象となり、17世紀になると、さらにオランダ人、イギリス人が加わった<sup>10)</sup>。このような状況が17世紀の後半まで持続していた。

とりわけ、16世紀ごろの台湾は海賊や倭寇の巢窟であるとともに、東シナ海と南シナ海の間の中継貿易地として、17世紀の後半には各諸国に略奪され、植民地となった。そして、植民地となった台湾に、農地開拓のための労働力として、中国本土から多くの移住者が来た。

## 2.3. 開拓期とのかかわり

2.2で見てきたように、明末清初に農地開発のため、中国本土から大量の人々が台湾に移住してきた。その時期の台湾の状況については、歴史的に次の三つの時期に分けることができる。

### 2.3.1. 大航海時代（16-17世紀）

16世紀（1544年）にポルトガル人が台湾にやってきた。同じ頃に、この辺りの海には倭寇、海商集団が蔓延している、明国も随分悩まされた。台湾近海に澎湖列島があるが、倭寇は明国から追撃を受けると、澎湖列島を越え、台湾にまで逃げ込んでいたという。当時の明国は台湾に対しては、<sup>11)</sup>風土病が蔓延する危険地域とっていたので、澎湖列島まで追撃しても、台湾にまで手を伸ばすこ

とはなかった。

一方、ポルトガルやスペインに遅れを取ったオランダは東インド会社を設立し、ジャカルタを占領し、中国や日本との貿易を考えていたが、その中継地として澎湖列島を占領した(1622年)。当時、明国は澎湖列島に官人を派遣しており、澎湖列島と大陸間の海峡をオランダに抑えられるのを嫌った。その後、オランダ人は明国との平和的交渉により澎湖列島から撤退し、代わりに台湾を占領した。

### 2.3.2. オランダによる支配 (1624-1662)

17世紀の初めに明朝がオランダに台湾の占領を許したのは、台湾を領土とみなしていなかったからである。台湾を占領したオランダ人は、台湾の南西沿岸の安平地方に要塞を築いて、そこを出会貿易の拠点とした。しかし、台湾はオランダ人が要塞を築く以前から、私貿易の拠点となっていたので、その貿易をめぐる、日本人とオランダ人が競合し、紛争が起こった。この事件がノイツ事件(台湾事件1628年)である。その後、日蘭両国の断交(1628-1632)にまで発展した。この台湾事件を解決するため、東インド会社は江戸幕府の意を受け入れて貿易再開にこぎつけた。しかも、その間にオランダ人は幕府に対する奉仕者としての地位を確立し、同時に幕府は日本人に対する台湾への渡航朱印状の発給を停止した。その結果、オランダ人は台湾の私貿易から日本人を排除することに成功した。一方、スペインは1620年代に、17年間台湾北部の鶏籠(現在は基隆)や淡水を占拠し、要塞を築いた。こうして台湾の北部と南部のそれぞれの一郭がスペインとオランダの植民地になった。その後、オランダ人がスペイン人を駆逐して全島を支配した。

他方、明末期の大陸では、あいつぐ兵乱と飢饉に加えて、農村は著しく疲弊し、農民が内外各地にその活路を求めていた時期であったため、台湾への移民も少なくなかった。オランダ人は植民地政策として、台湾南部の移住民を労働力とする農業開発に着手し、甘蔗栽培を奨励した。これはインドネシアの植民地政策において、漢人移民を雇用した経験によるものであり、移住民を使役して開墾に当たらせ、その開墾地を移住民に貸して、小作料を徴収した。そのオランダ人も1661年には、鄭成功によって台湾から追われることになった。

以上の背景の中で、17世紀の台湾では、農地開拓のため中国本土から多くの移住民が労働力として導入されてきた。その移民者たちの出身地は、福建省が圧倒的に多く、しかも泉州と漳州の両地が大部分を占めている。

### 2.3.3. 鄭成功による支配 (1662-1683) と清国による支配 (1683-1895)

鄭成功が台湾を支配した後、清国はすぐに台湾を封鎖する政策を取った。鄭成功の動きに対して、清国では1661年に「遷界令」を發布した。それ以前の1656年に、すべての船舶による商民の貿易を禁じていたが、この遷界令によって、さらに東南沿岸の福建、広東、江蘇、浙江、山東など類海5省の沿岸から20キロ、或いは30キロ内の居民を強制的に内地へ移そうとした。そして、沿岸での居住、貿易、耕作などが禁じられた。しかし、これは清国にとって予期せぬ結果となり、私貿易はますます盛んになり、封鎖政策に困窮した住民はどんどん台湾へ移住していった。台湾は移住民の増加で開拓が進み、耕地面積も飛躍的に拡大した。しかし、鄭成功の息子である鄭經の政権は財源確保のため、オランダ人以上の過酷な徴税を行ったので、政権に対する漢人の抵抗が高まった。一方、中国本土からの移民者の増加により、先住民は少数民族になり、漢民族の支配を受けるようになった。

清朝期の台湾における漢民族の人口について、初期の人数は約50-60万人と見られるが、雍正年間(1723-1735)には一族をあげての本格的な入植移民が行われ、次第に人口が増えた。そして、乾隆25(1760)年に、海外移民規制を完全に緩和し、清代嘉慶16(1811)年の人口調査によれば、当時の台湾の人口は200万人台に上っている<sup>12)</sup>。この入植・移民の過程で、17世紀初頭にオランダ東インド会社が台湾を占拠して台湾への植民政策を振興したことも、移民を促進した大きな原因となっていた。

清朝による台湾への植民政策は、当初から消極的であった。その後、約2世紀にわたる台湾統治政策の間も、台湾における清朝の社会資本の建設にはほとんどみるべきものがなかった。しかし、台湾の人口も増加し、19世紀初(嘉慶年間)には200万人以上、台湾省設置時期(1885年)には320余万人<sup>13)</sup>に達していた。そこで清朝はその後、台湾の経営方針を変更して、積極的に移住を奨励するようになった。そのため、台湾海峡を越えての往来が頻繁になった。

以上のように、17世紀から19世紀にかけての、中国南部住民の海外への移動・移住により、その地域的文化、慣習、民間信仰、宗教などが海外へも流出していった。そして、中国南部の民間信仰も台湾へもたらされた。

### 3. 台湾への民間信仰の伝来

#### 3.1. 背景

中国本土の航海の無事安全を祈る民間信仰や宗教などの台湾への伝播の背景については、次のように分析することができる。

第一に、海の信仰に関するものが多い。その理由は、台湾海峡の波が荒いことが挙げられる。海峡を渡る船はしばしば船難に遭った。中国大陸から台湾への移住民は、上述したように、ほとんどが南部沿岸地域である福建、広東の貧困な地域からきた人たちである。彼らは生活貧困から台湾に新天地を求めたのであった。当時は、航海が清国に対する違法行為であることに加えて、航海技術が未熟であったため、設備の貧弱な船で海を渡るとは命がけの冒険であった。海峡を渡る船はしばしば船難に遭った。そのような海上交通の状況下で、海の信仰についての靈験譚が多くの史料の中に記されていた。

第二には、16, 17世紀の倭寇、海賊、海商などの横行があげられる。また、それに加えて、台湾での移民者たちと先住民との対立より、内乱や紛争などが多かったことが挙げられる。このように危険な船旅や旅程には、安全祈願の信仰や宗教が不可欠である。

第三には、川の氾濫、旱魃による農作の不作なども、移民者たちが郷土神である媽祖に頼る原因となった。生活の全面にわたって日常的に祈ったことで媽祖信仰が盛んになり、定着していったとみられる。

以上のような背景の中で、17世紀に中国福建省、広東省からの移民者たちは、台湾海峡を渡って、台湾列島に渡来してきた。当時の航海業者や貿易商など、海に関係ある人たちは自分の船舶の中で、必ず媽祖像を祀るようになっていた。そして、彼らは乗船する際に、媽祖廟に参詣して航海の無事安全を祈り、その香火を頂いて、身の守りとして乗船し、台湾に着いた後、媽祖像を自宅に祀っていた。その後、海に面する場所に寺廟を建立していったという。

#### 3.2. 各信仰の定着と現状

中国大陸の移民者たちは、それぞれの地域的郷土神を台湾へもたらした。それらの神仏を祀るための寺廟の形成過程については、以下の表1~4の資料が参考となる。これらの表では、1910年代から1980年代までの台湾における主神の種類、寺廟数および各主神の寺廟数の比率(百分比)が示されている。

以上の4表(4史料)から、媽祖(天上聖母)はいずれも寺廟の主神として第三位に位置づけられている。なお、

表1 丸井圭次郎(1919)『台湾宗教調査報告書』附録 p.16

主神別	寺廟数	百分比
福德正神	669	19.25
王爺	447	12.86
天上聖母	320	9.21
観音菩薩	304	8.75
玄天大帝	172	4.95
有応公	143	4.11
閔聖大帝	132	3.80
三山国王	119	3.42
保生大帝	109	3.14
三官大帝	72	2.07
中壇元帥	66	1.90
神農大帝	60	1.73
釈迦	56	1.61
開漳聖王	53	1.52
玉皇大帝	51	1.47
開台聖王	48	1.38
文昌帝君	39	1.12
清水祖師	36	1.04
元帥爺	36	1.04
城隍	29	0.83
計	2961	85.18
寺廟総数	3476	

表2 増田福太郎(1939)『台湾の宗教—農村を中心とする宗教研究』p.5-13

主神別	寺廟数	百分比
福德正神	647	18.41
王爺	534	14.59
天上聖母	335	9.15
観音菩薩	329	8.99
玄天大帝	197	5.38
閔聖大帝	157	4.29
三山国王	121	3.31
保生大帝	117	3.20
釈迦	103	2.81
有応公	86	2.35
清水祖師	83	2.27
三官大帝	82	2.24
中壇元帥	73	1.99
神農大帝	66	1.80
開台聖王	57	1.56
開漳聖王	50	1.37
大衆爺	47	1.28
文昌皇大帝	30	0.82
義民爺	30	0.82
元帥爺	29	0.79
計	3200	87.41
寺廟総数	3661	

表3 劉枝萬 (1960)「台湾省寺廟教堂名稱主神地址調查表」 pp.51-54

主神別	寺廟數	百分比
王爺	677	17.63
觀音菩薩	443	11.54
天上聖母	383	9.97
福德正神	327	8.52
釈迦	306	7.97
玄天大帝	267	6.95
閔聖大帝	192	5.00
保生大帝	141	3.67
三山國王	124	3.23
中壇元帥	94	2.45
神農大帝	80	2.08
清水祖師	63	1.64
三官大帝	60	1.56
開台聖王	57	1.48
開漳聖王	53	1.38
元帥爺	47	1.22
三寶佛	46	1.20
有応公	46	1.20
城隍	44	1.15
玉皇大帝	38	0.99
計	3490	90.87
寺廟總數	3840	

表4 余光弘 (1982)「台湾地区民間宗教的發展—寺廟調查資料之分析」『中央研究院民族學研究所集刊』53, p.81

主神別	寺廟數	百分比
王爺	753	13.59
觀音菩薩	578	10.44
天上聖母	510	9.21
釈迦	499	9.01
玄天大帝	397	7.17
福德正神	392	7.08
閔聖大帝	356	6.43
保生大帝	162	2.92
三山國王	135	2.44
中壇元帥	115	2.08
神農大帝	112	2.02
清水祖師	99	1.79
玉皇大帝	81	1.46
三官大帝	77	1.39
開台聖王	70	1.26
開漳聖王	56	1.01
城隍	55	0.99
孚佑帝君	52	0.94
王母娘娘	51	0.92
廣澤尊王	50	0.90
計	4600	83.05
寺廟總數	5539	

1910年代の表1および1930年代の表2で第一位であった福德正神は、1960年代の表3になると、大幅に後退している。

この現象について、林衡道 (1976a: 42) が指摘したのは、地方性神仏と全国性神仏という観点から論じている。つまり、台湾では、1950年代から20年余りの間に、社会的形態は農業社会から工業社会に変貌して人々の生活様式が急激に変化する中で、郷土意識や地方観念などもそれに伴って変化していったとしている。その過程で、一部の地方性神仏 (広沢尊王、清水祖師、開漳聖王、三山國王など) の信仰が自然に衰微し、それに代わって全国性神仏 (閔聖帝君、玉皇大帝、孚佑帝君など) の信仰が興隆し、その祭祀が盛んに行われるようになったという。

これらの神仏を祭祀する寺廟が新しく建立された過程に、新しい定住地において移民者たちの信仰が次第に深く定着していった背景を見ることができるといえる。

### 3.3. 主要な歴史的媽祖廟の民間伝承

台湾にある多くの媽祖廟のうちから民間伝承をさぐるために、代表的なもの3例を以下に挙げてみる。

#### 3.3.1. 中部の北港朝天宮

台湾の中部に北港 (旧名は笨港) という地名がある。もともと北港は港の一部分で、川の北に位置しており、徐々に「笨北港」、「北港」と略された。「笨港」という地名は、もともとその地域に住んでいた台湾先住民がつけた地名で、台湾が清国に支配される前に、「Poonkan」という地名が17世紀オランダ人によって書かれた台湾地図上にも見られる。

清代の康熙22 (1683) 年に、台湾は清国の一部になった。『台湾方誌彙刊卷六諸羅縣志』<sup>15)</sup>によると、「笨港街」は近隣の町と比べて一番にぎやかな町だった。同書中にも笨港街に、康熙39 (1700) 年、住民により媽祖廟が建てられたと記載されている。

この北港媽祖における伝承は、北港朝天宮で編纂された『北港朝天宮志』<sup>16)</sup>によれば、康熙33 (1694) 年に、臨濟宗34世の樹壁という僧侶が湄洲にある祖廟「朝天閣」の媽祖像をもって、北港に上陸しており、その後賃借りした民家で媽祖が祀られていた。そして、数年後、同安県出身者の献地をうけて小祠を造り、人々の信仰を得て順調に発展し続けたという。

北港朝天宮には、乾隆36 (1771) 年と、咸豊9 (1859) 年の二度にわたる修繕などを施されて、媽祖像が安置されていた。ところが、台湾が日本の植民地となった明治

39 (1906) 年に地震で媽祖廟は破壊され、2年後の明治41 (1908) 年8月に再建が始まり、大正元 (1912) 年に廟が再び作られた。新しく作られた媽祖像が正殿の祭壇中央にすえられているが、それ以前には湄洲から分身されてきた媽祖像が置かれていた。これは「第一の媽祖像」という意味で「祖媽」と呼ばれ、媽祖が逆転した読み方になっているが、意味としては「祖媽祖」から来ている。北港朝天宮には、祖媽以外に五体の媽祖像が置かれている。日本植民地時代 (1895-1945) に、「台湾媽祖さま信仰大本山」と名付けられ、植民地時代の初期においては保護されたが、その後の皇民運動 (1937-1945) によって排斥され、本殿だけが日本の臨濟宗の協力によって保全された。第二次世界大戦後は台湾政府の保護が加わるとともに、民間の人々に篤く信仰されているため、今日でも台湾媽祖信仰の中心地となっている。そして、媽祖像本尊の分霊とされる寺廟が各地に建立されつつある。当時、樹壁和尚がもたらした神像は今日も残されている。

### 3.3.2. 北港媽祖像の性格

北港朝天宮の媽祖には航海神のみでなく、「農業神」「雨神」などの側面がある。その起源伝承としては、『臺灣府誌』<sup>17)</sup>によると、清光緒12 (1886) 年に、北港では長期間にわたり干害が起り、その時の県知事が北港の媽祖に雨乞いを行い、その後すぐ雨が降ったという伝説があり、県知事がそのことを清国の光緒皇帝に報告した結果、光緒皇帝が「慈雲灑潤」という扁額を北港の媽祖さまに寄進したと記されている。この伝説から見て、媽祖に雨乞いと豊稔祈願の霊験があり、「雨乞いの神」「農神」という機能を備え、その側面をもつ神格に変容されたと見られる。

北港の朝天宮は、一時期衰微した。その主な理由は、北港溪という川から流れ込む大量の土砂が北港に堆積して、船の出入りに重大な支障が生じて港の機能が停滞し、さらに毎年徐々に砂が蓄積していったために、港の機能を失ってしまったことにある。また、1894年に廟の前で火災が起り、付近の家屋がほとんど焼失した。その翌年に、台湾は日本の植民地になり、政治的に不安定になったことも災いした。しかし、毎年大勢の人々が北港の媽祖さまに参詣したこと、また、北港に新式製糖工場を建てたことによって、明治末期に北港はようやく回復した。

北港朝天宮は現在も台湾の媽祖信仰の象徴として、貴重な文化財となっている。毎年恒例祭、旧暦3月23日媽祖の生誕日祝いに、北港では華やかな神輿パレードが

行われている。その時に、外地に移り住んだ北港出身の人々もできるだけ戻ってきて、祝賀に参加することとなる。

### 3.3.3. 南部の土城鹿耳門聖母廟

土城鹿耳門聖母廟編纂の『台南土城正統鹿耳門聖母廟簡介』<sup>19)</sup>によると、鹿耳門の聖母廟は、1641年に創建され、始めは民間私設の小廟 (旧名「保安宮」) であった。1661年に鄭成功がオランダ軍を台湾から追払うために上陸し、オランダ軍を破って台湾を平定した際に、鹿耳門港が軍事的に演じた役割は極めて重要であった。その後、鹿耳門港は大陸との海上交通上重要な水路となった。

その鹿耳門聖母廟の本尊は、鄭成功当時にもたらされたものと記されている。当時廟の本当の地点は丁度鄭成功軍がオランダ軍を破った際に通過した鹿耳門港南方の鹿耳門村南端にあった。そこは北の港道を遠く離れ、海水の侵入を避けうる安全地であった。1661年に、鄭成功の台湾平定軍が港に入り、船舶陣を布いたが、その各船には船用型の媽祖を祀っていたという。しかしその後、台南土城の海岸線は変化してしまったので、鄭成功軍の上陸地を同定することはできなくなっている。媽祖廟初建は崇禎14 (1641) 年であったが、鄭成功が上陸に媽祖の神助を得たとして、永曆16 (1662) 年に廟を再建した。康熙58 (1719) 年には、台湾府が政府の名義で廟を改建し、「鹿耳門天后宮」と称した。その後、洪水で一時的に他の所に移ったが、1918年に現在地に戻り、1960年に現廟名に改めた。

### 3.3.4. 台湾南部の大天后宮

台南市の大天后宮の創立年代は明確ではないが、その歴史的伝承としては、1684年に鄭成功の政権が滅び、台湾は清朝の統治下に入る。かつて鄭成功の重臣であった清軍司令官の施琅は、湄州に近い平海港に本営を定めた。媽祖像の神威をかりて士気を高揚し、攻略に利用した。さらに、大艦が集結した平海での井泉の出現や、戦局を決定した澎湖諸島の海戦勝利など、征討の成功に天妃の加護がありとして清朝に奏請した。その結果、康熙帝より「天后」の称号を授かり、台南の鄭成功の旧廷を天后宮に改めたのである。境内には清の皇帝、雍正、道光、咸豊、光緒の親筆の額や施琅が造立した石碑が残されている。

この寺廟の伝承として、清朝における反乱や対外戦争のたびに媽祖を護軍の神として崇尊し、国家への忠義の象徴とし全国の都市に祀るようになった。この歴史的伝承により、媽祖信仰の台湾への伝播移入は、単に民間的

レベルによってだけでなく、国家的レベルでも大規模に行われたと言える。現在、台湾の主要な媽祖像廟は、そのほとんどが、康熙22（1683）年に台湾が清朝の版図に組み入れられてから後のものである。

以上、台湾で代表的な媽祖廟の伝承を取り上げた。その中で最も注目される特徴は、台湾平定の軍船が各々祀っていたような「船仔媽」（船用型）の媽祖像が多く、また、いずれもいわゆる「港市型の媽祖廟」であり、従って、境内に祀られている媽祖像は歴史的・伝承的に中国本土と深い関わりがある。それらの媽祖廟が建立された背後に、中国福建人の移入により形成された華人移民圏があり、そこから形成された媽祖文化、媽祖信仰がある。これらの媽祖廟建立の民間伝承を見ると、媽祖信仰は台湾の民間の人々にとって単なる民間信仰ではなく、実は当時中国本土から移民してきた先祖たちの歴史的アイデンティティを表すものであり、そこに共通の意識が結成されたものと考えられる。

### 3.4. 小結

17世紀における媽祖信仰の台湾への伝来と展開について、その過程と背景を考察した。台湾北港朝天宮をはじめとして、各地の媽祖廟が広い範囲で多くの信仰者を獲得した。その背景にはもちろん、中国大陸から台湾への漢人の移住の際に、媽祖が航海守護神として信仰を集めてきたという歴史があることを忘れてはならない。

一方、中国の歴史を俯瞰してみると、王朝の交替とそれに伴う戦乱と自然災害による生活場所の放棄、また、人口の爆発的増加による食糧不足から、人々は新しい生存空間を求めて国内や海外への移動・移住などを繰り返してきたという歴史がある。こうして東シナ沿岸の各地域、東南アジア各地の港市への移動・移住があり、また18世紀末以降の西欧植民勢力による本格的植民地の開発に伴い、大量の中国人の無資本労働者が海外に移動したために、アジア各地に華僑社会が形成された。

その歴史の変遷の中で、移住民の団結力の象徴としての民間信仰が移民先で引き継がれていった。本来、媽祖はローカルな郷土神であったが、地域の人々が同じく故郷の神を信仰することにより、同じ地域の人々の団結力の象徴となった。そして、この団結力が移住者の結びつきを強め、新しい移住先での種々の困難に対応する力となったと考えられる。このような背景の中で、彼らの間に言語・習俗による地域的集団がつくられ、それを基礎として、集落、村、地域社会が形成されていくことになったと考えられる。

以上のように、台湾群島への媽祖信仰の伝来や、媽祖廟の建立は、福建省出身の移住民や船舶関係者によって建立されたことが明らかである。また、これらの媽祖像はいずれも「船用型」に由来するものであり、廟は「港市型の媽祖廟」である。

その後、移住民の人口の増加に伴い、港地域の周辺に建立されただけでなく、他の地域においても多くの媽祖廟が建てられるようになった。そして、現在の台湾、東南アジアの華人社会において、媽祖廟は漢人移住民の信仰の中心となり、精神的支柱であるとともに、華人移民圏のアイデンティティとして考えられ、グローバルな信仰の対象になった。

## 4. 民俗的変遷

### 4.1. 王爺信仰の起源

台湾では、代表的な海の守護神である媽祖信仰は全地域に見られるが、もう一つ別の海の信仰である王爺信仰が西南部沿岸を中心に盛んであり、現在でも西南部や南部を中心として重要な民間信仰となっている。

表1～4で示されているように、それぞれ四つの時期において、王爺信仰はいずれもトップの位置を占めている。王爺信仰は、特に台湾の環西南沿岸で盛んであるが、中部ではまったく見られない。では、なぜ台湾の西南海岸地域で盛んであるのか。その理由として、明朝の鄭成功が中国本土の広東省、福建省の移民者たちと共に西南沿岸に上陸したことに伴って、王爺信仰が最初に西南沿岸に伝播したからである。

王爺信仰の由来に関して、多くの伝説がある。王爺の性格は単一の神仏ではなく、その素性が多様である（劉枝萬1963, 1966に詳しい）。その中で王爺は、もともと瘟疫わんえきの神であると言われた。瘟とは流行性の急性伝染病を指すことばであるが、特に中国東南沿岸地域は古くからこれらの病気がはやりやすい地域とされ、瘟神つまり疫病神の信仰も盛んであった。このような伝染病を広めるのは悪鬼の仕業であるとする考えも早くから見られる。そのため、東南沿岸、特に浙江省から、福建省、広東にいたる海域には、年に一度決まった時期に、あるいは疫病がはやったときに瘟神を送るという習俗が広く見られる。

このことについての最も古い史料である南宋初期の『鷄肋編けいりくへん』<sup>20)</sup>には、この時代に湖南省において、社を組織して王者の儀物をもって、瘟神を祭り、船を作って送ったことが記載されている。また、明代に入り、17世紀初



めの謝肇淛の「五雜俎」に伝えるところでは、瘟疫のしばしば流行した福建省沿岸部において、瘟疫を駆逐するための厄祓いの法事を行ってから、紙製の船を川や海に流すという風習があったという（伊能嘉矩1928：453）。疫病がはやった地域では、王爺送りというよりは、むしろ「瘟神流し」があったことが注目される。このように船を作って流す風習は、すでに17、18世紀の台湾の県誌（『台湾府誌』『鳳山縣誌』など）にも記載されている。

#### 4.2. 台湾の「王爺送り」—その起源と機能

17世紀頃に、王爺信仰の発祥地である福建省の沿海から流された王船の多くが、風向きと海流の関係で澎湖島や台湾西南部の海岸に流れ着いたということは、明朝の謝肇淛が万暦年間に著した『五雜俎』に記されている。『五雜俎』は当時の最も信頼できる史料である。また、台湾海峡に隣接する台南県北門郷にある東隆宮の「王爺信仰文物館」の展示史料によれば、康熙56（1717）年の陳夢林編『緒羅県志』巻8「風俗志」、康熙59（1720）年の陳文達編『台湾県志』巻1「風俗雜俗」、光緒18（1892）年の林豪編『澎湖序志』巻9「風俗風尚」などの史料に、福建から台湾の西南沿岸に王船が漂着してきたということが記載されている。

台湾は熱帯・亜熱帯域に位置し、先住民のみならず、移民者たちにとっても、その地域は環境的に厳しい気候にあり、しかも、医療的にもあまり発達してなかったので、多くの人々が風土病（瘟疫病など）で命を取られた。劉枝萬（1966：62）の研究によれば、康熙7（1668）年に、台湾の住民約23万人の中、瘟疫による死亡者数は5、6千人にのぼったという。当時の移民者たちは、瘟疫という悪疫の神が人間界にたたり、疫病を起こすと信じた。当地の人々は疫神の降臨を恐れ、漂着してきた王船や、王爺を迎え、寺廟を作って、祭祀をおこなった。このように、福建、台湾地方では、王爺を載せた「王船」を海に流すことによって、境域から象徴的に疫病を流す「王爺送り」という祭祀儀礼で、悪疫の神々を送り出すために、紙や木材で船を造り、瘟疫の神である王爺を「王船」に載せ、他の悪疫の神と共に連れ去ってくれるようにと祈る祭祀儀礼がおこなわれていた。この、疫病神を駆逐する「王爺送り」という古来の儀式が盛んにおこなわれていたのである。

他方、王爺は、天の最高神である玉皇大帝の代わりに、地域を巡狩するという性格を持っており、三年一度巡狩するために人間界に下ってくるとされ、人間の善悪を視察する「代天巡狩」としての役割も併せ持つようになって

た。王爺を祀る廟を「代天府」と称する。そのような背景の中で、台湾の西南沿岸地域の漁村では、漁民、船乗り、船に関わる人々によって盛大な祭りがおこなわれ、供物を提供し、王爺の機嫌をとり、丁寧な儀礼がおこなわれる。また、地域によっては、旧3月下旬頃に、3年か5年に一回王爺の祭典における「王醮」という祭祀儀礼が盛大におこなわれ、王爺の機嫌をとり、祀ることが漁村・集落における最大の年中行事となっている。この祭祀儀礼は、漁村や村落の災厄を船に載せて放ち、同時に福がもたらされるという意味を表している。

一方、台湾開拓の初期の移民者たちにとって、王爺はそうした実態としての海からくる神というだけではなく、実はより根源的には死者霊の集まるところからきた神であると考えられていた。特に悪運、病気、災厄の根源であるという考えも含まれていた。これは、亡霊を媒介に王爺と瘟神が重ねられた結果である。つまり、王爺はそれ自身が疫病の神というだけではなく、災厄とともにくる亡霊でもある。さらに、王爺のほかにも、船に様々なモノを乗せて来往したという考え方が伝承されていた。

このような背景のもとに、王爺信仰の機能には二つがあると考えられる。一つは、厄祓い、豊作や除災などの招福儀礼である。この機能は、基本的に媽祖信仰にも通じる。もう一つは、「王船」を送ることにより、亡霊を追い払い、祖先たちの霊を他界に送り出すという機能である。この王爺信仰は、台湾の西南沿岸において、航海守護神の媽祖と並んで、船に関わる人々に最も信仰され、漁村や村落に定着していた。現在では、瘟疫という病気は消滅したが、昔の習慣は民間信仰として、そのまま残され、台湾の西南海岸の漁村において、その光景は今でも民俗習慣として見られる。

#### 4.3. 台湾における王爺信仰の特徴

筆者は、2011年12月28日に、台湾海峡と隣接する西南部の台南県三寮湾にある「東隆宮」という寺廟を調査した。東隆宮の中に、10メートル余の木製の祭祀儀礼用の王船が置かれている。それは、「王爺送り」という祭祀儀礼で使われる王船と同じように作られたものである。王船の最も注目すべきことは、その後部に媽祖像を祀るための小祠堂が設けられていることである。その小祠堂の中に、小型の媽祖像と、千里眼および順風耳が配祀安置されている。すなわち、王船に安置されている媽祖像は「王爺送り」という祭祀儀礼の中で、航海安全の守護神として、王爺を無事に他界に導くように祀られている

のである。「王船送り」は病氣治癒、航海安全、豊漁の神、全能的神などの機能を帯びる祭祀として、船乗りや漁民たちに信仰されている。

また、東隆宮の付属施設として「東隆宮王爺信仰博物館」という博物館がある。博物館の学芸員によると、東隆宮では、現在でも3年か5年に一回の「王船送り」という祭祀儀礼がおこなわれている。その儀礼の中で、寺廟からの「媽祖出迎え」という行事があり、この行事は、「王船送り」という儀礼の中で最も華やかにおこなわれているという。村の人々や、信徒たちは媽祖の出迎えに盛り上がる。媽祖像は神輿に乗せられて、行きと帰りの道筋では「遶境」活動が行われ、媽祖像は王船の中にある神棚の中に安置される。また、王船儀礼が終わると、媽祖像を本来の寺廟まで送る行事がおこなわれる。

この「媽祖出迎え」という行事は、まさに中世末期から近世初期において、長崎港に唐船が来航した際におこなわれた「菩薩あげ」と「菩薩御し」を反映しており、江戸時代の伝統的行事を現在でも伝えているものである。

このように、台湾西南部では媽祖信仰と王爺信仰が直接に融合され、並列的に信仰されていたと考えられる。台湾の神々は地域によって選ばれるものであり、日本に見られるような全国的に広がる「神仏の習合」ではなく、選ばれた神々が同時に並べて祀られる「並列」の関係にあることが大きな特徴である。

台湾の西南沿岸や南部に分布している媽祖廟には、王爺と合祀された寺廟がよく見られる。例えば、台湾の代表的媽祖廟「鹿耳門聖母廟」の中には、主殿の一段階と二段階の中で、王爺という神々が祀られている。さらに祠堂に王船が置かれて、王船の中に王爺神々が祀られている。正統鹿耳門聖母廟編の『台南土城正統鹿耳門聖母廟簡介』によれば、正統鹿耳門聖母廟に安置された王船は1912年に、福建省莆田から流され、澎湖島を経て漂着してきたものとされ、人々を助けたことから、この地に大切に祀られるようになったという。

#### 4.4. 他の神仏との合祀

長崎の唐三ヶ寺など日本の一般的な媽祖廟境内でよく見られる光景として、媽祖像の両側に千里眼と順風耳という護衛役の神が配祀されている例が多く見られる。それに対して台湾の媽祖廟では、主神である媽祖像の両側に他の神仏を合祀する光景が少なくない。台湾における初期開拓地域の南部では、福德正神と註生娘娘という二神を脇侍とする媽祖を祀る寺廟が多く見られる。

特に台湾南部の彰化県には、福德正神（土地公）と註生娘娘を媽祖とセットで合祀する寺廟が多い。洪長源（2007：58）の調査によれば、彰化県の媽祖廟主神の合祀の中で、それらのセットの占める割合が高いということが指摘されている（例えば、安德宮、至靈聖宮、天瑤宮など）。その背景の一つとして、表1～2で示されるように、1930年代までに、福德正神が民間信仰の神々の中でトップの地位に置かれていたことが挙げられる。福德正神は土地を司る神であるが、中国大陸からの移民者たちが新しい土地に定住してからも、土地の神であり、生活の守護神である福德正神を篤く信仰したものと推測することができる。

一方、註生娘娘は、女性の神様であるが、特に若い女性になじみの深い神の一柱である。しかし、註生娘娘は観音や媽祖のように、寺廟の主神として祀られることはあまり多くないとみられる。なぜなら、おそらくこの女神の司る機能が子授け、安産、育児などに限定されているからである。

しかし、台湾における開拓初期においては、女性にとって子作りや子孫を残すことは、先祖祭祀を受け継ぐ者を確保することであり、当時において最も大事なことの一つであった。そのような背景の中で、南部の媽祖廟の境内には註生娘娘を合祀する廟が少なくないと考えられる。

このような祭神の組み合わせは、特に台湾初期の開拓地である南部の寺廟によく見られる。これらの現象は、当時の台湾社会において、一つの地域的特徴として表わされている。

#### 4.5. 小結

媽祖信仰は、その信仰の中心地である中国大陸から、他の周縁地である日本本土、琉球、台湾などへ伝播し、それぞれの地域的民俗変容（文化交渉）を経て、独特の内容を帯びて形成されている。媽祖とともに台湾で信仰されている王爺、福德正神、註生娘娘、竜王などはいずれも中国由来の神仏であるが、伝播の過程において、その地域の文化と交渉したり融合したりした。そして本来の神格に変容が起こり、他の神格の側面を帯びたものへと変化したと見られる。つまり、神の性格は恣意的であり、神の機能的側面すなわち御利益は、信仰者が恣意的に形成していったと考えられる。それらの事例は、それぞれの地域で媽祖信仰が日常的に変容を遂げつつあったことの例証となる。しかし、歴史性や地域性を勘案すれば、これらの民俗的変遷の事例は、むしろ当然のことと

も考えられる。

なぜなら、地域的、社会的、民俗的な文化・習俗が、時代の流れとともに変容することが自然だからである。このような状況は、同じ海洋文化である日本でも見られる。例えば、日本人々に古くから最も親しまれてきた「七福神」という七柱の神様は、福を運んでくるめでたい存在として信仰されている。七福神の中にエビス（恵比寿）という神様が存在しており、古くは「大漁追福」の漁業の神であったが、時代の移り変わりとともに、福の神として「商売繁昌」や「五穀豊穡」をもたらす神、商業や農業の神様となったとされる<sup>28)</sup>。そして現在は、あらゆる機能を帯びた守護神として認識され、信仰されている。

つまり、神々の性格は、どの地域にあっても、時代の流れにつれて変容していくと見られ、それは信者層の変化を反映していると考えられる。

## 5. まとめ

近世において、台湾は東アジアにおける国際貿易の商業活動船などが最も頻繁に往来していた地域であり、中継地として重要な役割を果たした。

台湾への入植移民者は主に、17世紀以降に大陸から移住した福建省南部出身の閩系の人々および福建省、広東省の内部出身の客家系<sup>はっか</sup>の人々である。彼らは流れの厳しい台湾海峡を越えて渡ってきた時、移住以前から崇敬していた媽祖像を持参して、航海の安全を祈った。その結果、無事に台湾に到着すると、持参した媽祖像を移住先に建てた簡単な住居の中に安置して神の加護に感謝し、引き続き開拓地で安全や繁栄を祈願した。しかし、新しい居住地においては、マラリアなどの伝染病が流行しやすいばかりでなく、また周囲に先住民の居住地があり、彼らとの縄張り争いも生じた。さらに、開拓が進めば、漢人同士の間にも土地争いなども生じてきた。移住地に適応しにくい漢人たちにとって、身を守るのは、自分の力と携えてきた神の力であった。その厳しい戦いの結果、開拓が順調に進み、生活の基盤も確立された。そうなる、これまで私宅の中で祀られてきた媽祖像のうち、靈験があらたかで、多くの人々に福をもたらすと認められた神が、その後、地域の守護神を祀る目的で作られた寺廟の中に安置されるようになった。

10世紀に、郷土の守護神、航海の守護神として福建で発祥した媽祖信仰は、福建人の通商航海が盛んになるに及んで、17世紀に台湾に伝播した。はじめは単一的な

「地方の郷土神」という性格から、「航海安全の守護神」に、そして周縁地への伝播過程において、その地域的受容により、「移民の守護神」「雨乞いの神」「農神」「護戦の守護神」「万能の神」という複数の神格を生じ、多様な側面を持つ神へと変容したと見られる。また、当初、中国本土からの各地の移民者たちは港町だけに媽祖廟を建立したが、次第に全地域に媽祖廟が建立されていった。それらの移民者や商人たちは、台湾ばかりでなく、東南アジア方面にも盛んに進出していったが、彼らも台湾へ進出した人々と同様に、媽祖信仰を携えていった。現在でも東南アジア各地の華僑たちは、媽祖を祀っていることが多く、福建省の人ばかりでなく、海外進出していった華僑たちの間に媽祖信仰が広がっていた。このことを通じて、先祖移民者としてのアイデンティティを再確認する動きも見られるようになった。こうして、媽祖信仰は単なる民間的、宗教的な信仰、御利益を得るための信仰の対象であるだけでなく、移民者たちにとって、歴史的・政治的な意識と非常に強く結びついており、その歴史を通して自分たちのコミュニティの正統性を主張することと密接に結びついていた。

近年でも、台湾の比較的歴史が長い媽祖廟では、定期的な「巡礼」（祭典）が盛んにおこなわれている。媽祖の信徒たちは、巡礼することで祖廟への信仰を維持し続けている。それは、17世紀に最初の移住者が上陸したところへ巡礼に行くことでもある。

今後の研究課題としては、引きつづいて、アジアの中で、現在でも最も媽祖文化、媽祖信仰が生きている地域である台湾を取り上げ、比較民俗学的視点から、その巡礼（媽祖の祭り）について、それがどのような祝祭空間であるのか、またどのような祭祀儀礼をおこなうのかを中心として考察する予定である。

### 注

- 1) 媽祖は、別名「天上聖母」とも呼ばれる女神で、10世紀後半に中国南部の福建省で発祥し、漁民を中心に航海守護神として、11世紀前半から信仰を集め、13世紀には中国のかなり広い地域に広がった。また、明朝の1445年に、「太上老君説天妃救済靈驗經」が道教の經典『正統道蔵』に収められているが、これは道教の立場から伝記したものである。このことから、媽祖信仰が明代の道教に取り入れられていたことは事実である。しかし、台湾の一般の人々は媽祖を生粋の道教神として考えていないようである。
- 2) 藤田明良（1996）「中世「東アジア」の島嶼観と海域交流—島嶼論への歴史的アプローチのために—」『新しい歴史学のために』222（23）、同（1998）「東アジアにおける「海域」

- と国家」『歴史評論』575(8), 同(2006)「日本近世における古媽祖像と船玉神の信仰」黄自進(主編)『近現代日本社会的脱変』中央研究院人文社会科学研究中心 pp.171-220など, 参照。
- 3) 拙稿(2011)「東アジア海域における船神信仰—九州、琉球列島への媽祖信仰の伝来—」『鹿児島国際大学大学院学術論集』第3集。同(2011)「九州の唐人町における媽祖信仰—南薩摩への伝播とその変容—」『鹿児島民俗』第140号, 鹿児島民俗学会編, 参照。
  - 4) 台湾にキリスト教が伝わった17世紀初頭にスペインとオランダが原住民に宣教したのが最初であり, 以降は欧米の宣教師によって本省人や原住民の間で改宗が進み, なかでも長老派教会が最も多く信徒を獲得した。Google 検索フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」「台湾の宗教」(2012年3月22日) 参照。
  - 5) 丸井圭次郎「台湾宗教調査報告書」p.40参照。
  - 6) Google 検索フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」「基隆中元祭」(2012年3月22日) 参照。
  - 7) 斯波義信(1990) pp.167-195参照。一方, 真栄平房昭(1992)「『対外関係における華僑と国家—琉球の閩人三十六姓をめぐって—』『アジアのなかの日本史Ⅲ 海の道』(東京大学出版会)では, 中国人の海外移民の歴史は次の三つの時期に大きく区分されている。すなわち, 「第一期は九世紀(唐代)の第一次商業革命期, 第二期は十六世紀(明代)の第二次商業革命期, そして第三期が十九世紀以降(清代)である」という(p.24)。
  - 8) 林衡道(1976b) pp.7-17参照。
  - 9) 康約(1991)によれば, 明末に福建と澎湖からの漁民は台湾西南海にボラとりを行っていた。当時中国からの漁船は, 必ず西南部にある平安港のオランダ人の官人に登船し, 税金を支払うことになっていた(p.101)。
  - 10) 荒野泰典(1987) pp.184-194参照。
  - 11) 出会貿易とは, 江戸初期における日明貿易の形態。明の海禁政策により, 両国の商人が台湾・呂宋(ルソン)などで落ち合って取引するもの(三省堂『大辞林』第二版より)。
  - 12) 林衡道(1976b) p.10参照。
  - 13) 刊『台湾省通志稿』巻2「人民志人口篇」では漢族系人口については25,000家族と30,000家族などの説があるが, オランダ統治末期の人口における原住民と漢族人との比率はほぼ同じであった(pp.101, 105)。また, 清朝は数次にわたって, 台湾への渡航を制限したり, 禁止したりした。なお, 1893年における漢人系人口は255万人だと推定される(p.281)。
  - 14) 台湾の澎湖列島にある天后宮(媽祖廟)は, 台湾において, もっとも古い寺廟である。その寺廟の創立の年代は明確ではないが, 明末に建立されたという(林衡道1976a)。一方, 朱天順(1996)では, 明代以前に台湾は福建省と密接な交渉がなかったが, 明末の嘉靖42(1563)年に, 明軍は澎湖列島を占拠していた倭寇を征伐し, 以前からあった媽祖廟を拡げたという。現在では, 台湾地区第一級古跡によれば, 万暦20(1592)年に建立されたと記されている。これらの文献史料によれば, いずれにしても台湾に最初に建立された媽祖廟であった。それ故, 台湾における媽祖信仰の伝来は16世紀末のことであるが, 民間信仰として全地域に信仰されるようになったのは17世紀のころであろうと考えられる。
  - 15) 臺灣銀行經濟研究室編輯(1958)『臺灣研究叢刊第五五種臺灣方誌彙刊卷六諸羅縣誌』台北: 中華書局, p.140参照。『諸羅縣誌』全12巻は, 清朝康熙55(1718)年から編纂され, 康熙56(1717)年に完成した。
  - 16) 蔡相輝(1995)『北港朝天宮志』, 雲林: 北港朝天宮, 参照。
  - 17) 周元文(1712)『臺灣文獻叢刊第六六種『臺灣府誌』』, 臺北: 大通書局印(1984) 参照。
  - 18) 台湾の宗教的行事は, すべて農曆(陰曆)に基づいて行われる。
  - 19) 「土城正統鹿耳門聖母廟」のホームページ「台南土城正統鹿耳門聖母廟簡介」より(2012年3月22日) 参照。
  - 20) 莊綽(1133)『鷄肋編』巻上, 重刻本(1983) 北京: 中華書店, p.21参照。
  - 21) 明朝謝肇淛の『五雜俎人部』には, 「閩俗最可恨者, 瘟疫之疫一起, 即請邪神香火奉祀于庭, 惴惴然朝夕拜禮, 許賽不已, 一切醫藥付之罔聞。不知此病原都熱所致, ……而謹閉中門, 香烟燭燻蒿蓬勃, 病者十人九死, 即幸而病癒, 又令巫作法事, 以紙糊船送之水際。此船每以夜出, 居人皆閉戶避之」と記されている(劉枝萬1983, p.287)。
  - 22) 高拱乾(1696)『台湾府誌』巻2(台湾行政院文化建設委員會, 臺灣史料集成編輯委員會編, 2004再版) 台北: 遠流出版事業。王瑛會(1765)『鳳山縣誌』巻5「典禮志」(台湾行政院文化建設委員會, 臺灣史料集成編輯委員會編, 2006再版), 台北: 遠流出版事業, など参照。
  - 23) 台湾では3年に一度, 「王船送り」という儀礼をおこなう。その祭典の具体的内容は, 王爺という神像を作り, 祀った後, 供物, 金紙, 銀紙など(金紙は主に神に対して捧げる紙銭で, 銀紙は祖先や鬼に対して捧げる紙銭である)とともに王船に載せて海に流すという行事である。また, 「王船送り」という行事には, 王船を海に流す「遊地河」と, 海辺で焼く「遊天河」の二つの種類があった。伝統的王船は木製であったが, 経費問題など竹, 紙で作られる王船に変わったと推測される。本来は海に流すかたちであったが, 現在は木製王船を海辺で焼却する。これは王船を「天河」に送り返すためなのだという。福建省の王船送りは海に送り出すもので, このかたちが本来のものであるが, 現在では焼く形式を取るのが一般的である。今回取り上げた王船信仰の「王船送り」という醮祭は, 台湾南部の台南県・市, 高雄県・市及び屏東県・市に分布している王爺廟でおこなわれている。
  - 24) 史書地誌の類に表れた, 近世以降台湾における疫病発生の記録については, 劉枝萬1966, pp.61-69, 伊能嘉矩1928, pp.391-419にまとめられている。
  - 25) 台湾では, 一定の規模と歴史があるほとんどの寺廟で, 「醮」祭りをおこなう。特に, 台湾の南部, 西南部の沿岸地域に

- 分布しており、特別の行事として行われる。道教史の上からみると、醮の儀礼は六朝時代に生まれた。隋唐五代を通じて儀式が整備され、宋代に至ると民間宗教者の活動や、儀式の簡略化などによって醮は一般民衆の中でも広く行われるようになった(福井康順他編(1983)『道教』第1巻, 平河出版社, pp.210-236)。従って、王醮は、宋代から明代にかけて成立、発展していったと思われる。本稿での定義は、「神が地域の平安を守護したことに対して感謝するとともに、これからも引き続き地域の平安と繁昌をもたらすように祈願するために行う祭祀儀礼」である。
- 26) 遶境とは、神像を神輿に載せて、村の各地付近を練り歩く巡幸のこと。また、神像が遶境に参加すること。その目的は廟内の神だけでなくより多くの神が遶境に参加し、地域の平安を祈ることにある。
- 27) 長崎の唐三ヶ寺とは、興福寺(南京寺, 1623開創)、福濟寺(漳州寺, 1628年開創)、崇福寺(福州寺, 1629年開創)であり、これらの三福寺に聖福寺(広東寺, 1677開創)を加えて四福寺とも言う。当初は船宿や知人の家などに媽祖像を預けたのであるが、次第に来航する唐船の数が増加すると、同郷出身者の仲間の集合所が菩薩揚げの所とされるようになった。それらの安置場所が後に三福寺などの唐寺として整備されたのである。
- 28) Google 検索フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」「七福神」(2012年3月22日) 参照。
- 文献(著者のアイウエオ順)
- 〈和文〉
- 荒野泰典(1987)「日本型華夷秩序の形成」『日本の社会史第1巻 列島内外の交通の国家』東京: 岩波書店, pp.184-194
- 伊能嘉矩(1928)『台湾文化志』中, 東京: 刀江書院, p.453, pp.391-419
- 朱天順(1996)『媽祖と中国の民間信仰』東京: 平河出版社
- 斯波義信(1990)「華僑」「移動と交流」濱下武志など編, 東京: 岩波書店, pp.167-195
- 原田禹雄(2001)『夏子陽 使琉球録』沖縄: 榕樹書林, pp.163-166, p.262
- 福井康順他編(1983)『道教』第1巻, 東京: 平河出版社, pp.210-236
- 外間守善・波照間永吉(1997)『琉球国由来記』東京: 角川書店
- 前島信次(1938)「台湾瘟神王爺及び送瘟風俗の研究」『民族学研究』4(4) 日本民族学会編輯 pp.25-66
- 真栄平房昭(1992)「対外関係における華僑と国家—琉球の閩人三十六姓をめぐって—」『アジアのなかの日本史Ⅲ 海の道』東京大学出版会
- 増田福太郎(1939)『台湾の宗教—農村を中心とする宗教研究』東京: 養賢堂, pp.14-25
- 丸井圭次郎(1919)『台湾宗教調査報告書』台湾総督府編, 1993年復刻版, 台湾: 幼捷出版社
- 横山重(1972)『琉球史料叢書第3巻』東京: 東京美術, p.19
- 劉枝萬(1993)『台湾の道教と民間信仰』東京: 風響社, p.38
- 劉枝萬(1983)『中国道教の祭りと信仰』上, 東京: 桜楓社, p.389
- 劉枝萬(1994)『台湾の道教と民間信仰』東京: 風響社, pp.128-132
- 〈中文〉
- 洪長源(2007)「風中的故郷—濁水溪出海口の大城郷」『彰化芸文』春季刊, 彰化県文化局編
- 康豹(1991)「屏東東港鎮的迎王祭典: 台湾瘟神與王爺信仰之分析」『中央研究院民族学研究所集刊』第70期, pp.95-210
- (清) 蔣毓英, 高拱乾, 范咸等(1985)『台湾府志三種』, 北京: 中華書局
- (明) 謝肇淛, 岩城秀夫訳注(1996)『五雜俎』巻6, 東京: 平凡社
- 周鍾瑄(1717)『諸羅縣志』, 臺北: 臺灣銀行經濟研究室編(1962)
- 台湾省文献委員会編(1964)刊『台湾省通志稿』巻2, p.101, 105
- 余光弘(1982)「台湾地区民間宗教的發展—寺廟調查資料之分析」『中央研究院民族学研究所集刊』53, pp.67-103
- 劉枝萬(1960)「台湾省寺廟教堂名称主神地址調査表」『台湾文獻』11巻2期 pp.37-236, 臺灣省文献委員会編纂組編
- 劉枝萬(1963)「台湾之瘟神信仰」『台湾省立博物館科学年刊』6 pp.109-113
- 劉枝萬(1966)「台湾之瘟神廟」『中央研究院民族学研究所集刊』巻22, 中央研究院民族研究 pp.53-950
- 劉枝萬(1983)『台湾民間信仰論集』台北: 聯經出版事業公司, pp.1-7
- 林衡道(1976a)「台湾民間信仰の神明」『臺灣文獻』26巻4期, 臺灣省文献委員会編纂組編
- 林衡道(1976b)『台湾開拓史話』台北: 青文出版社, p.55
- (チェン ジャシュー: 大学院国際文化研究科博士後期課程)